

反省文 2018

M1 安達 剛

今年度の記録

・ 5000m

11月23日 第3回順天堂大学長距離競技会 16分29秒26

12月23日 第190回松戸市陸上競技記録会 16分20秒97

・ フルマラソン

10月21日 ちばアクアラインマラソン2018 4時間20分12秒(グロス)

今年は私にとっていろいろ刺激になることが多く、市民ランナーとして5000m13分台を記録した知り合いもいれば、高校時代の同期は医学部ながら5000mの自己ベスト更新、一学年下の後輩は箱根駅伝の学生連合に選出されるまでに成長した。

ここ数年はモチベーションが下降気味であったが、最近改めて自分の積み上げてきたものが結果として記録という数字に表れる過程のおもしろさ、陸上競技の醍醐味を思い出すことができた。

また、時間がないと思っけていても、自分より忙しい社会人の方々の陸上への取り組み方をお聞きする機会が多くあり、時間は作ろうと思えば作れること、タイムマネジメントの必要性を感じた。

来年は「後悔のない」ように、学生として部活ができるこの環境を大切にしたい。前半はおそらく就活や研究でバタバタしてしまうだろうが、それが落ち着いたら社会人に向けて、必要なものを身につけつつ、やり残したことがないよう悔いのないように残りの学生生活を送りたい。

千葉大学陸上競技部での6年間を終えるにあたって

教育学研究科 学校教育学専攻 教育発達支援系

金子 元貴

書いた文章を読みやすいように繋いだり並び替えたりする作業はとても嫌いなので（論文書くのに向いてない）、つらつらと書いて終わりにしたい。

I. 自身の活動を振り返って

過去5度の恥ずかしい反省文が残っているので、詳しいことは省くが、この6年間の陸上競技生活で目標を達成できた回数は2回だった。これが少ないのか多いのかは人それぞれだと思うが、「満足する結果」ではなかったことにだけ留意したい。

1度目は2年次の関カレでのマイル入賞・大学新である。この記録は現在も残っていて大変嬉しいが、自身のLapが49秒台であったことが「満足する結果」とならなかった理由である。

2度目は4年次の茨大戦での400mH大会新とMVPである。こちらの記録は僅か2年で消えることとなったわけだが、こういったものは早い者勝ちで、当時、全種目の中で唯一残っていた昭和の記録を遂に塗り替えたということで、MVPをいただくことができた。しかし、記録が自己ベストなわけでもなく、しょっぱかったのが「満足する結果」とならなかった理由だ。

結局のところ、この6年間で目標を達成することはあっても、「満足する結果」は1度も得られなかった。当たり前だろうと思うかもしれないが、ここで言う「満足する結果」というのは飽くまで一時的なものであり、何も、出せると思っていなかったような記録が出せたというほどのものではない。自己ベストを更新した上で望んだ結果を出す程度のものである。考えてみれば、千葉大学に合格した時に思い描いていたようなパフォーマンスには程遠い結果で、考えれば考えるほど虚しくなってくる。

II. 短距離から中長距離への転向

今年10月、ある決断をした。11年半続けてきた短距離を辞め、中長距離へと転向した。これだけ続けてきても伸びがほとんどない短距離に見切りをつけたわけだが、運動生理学の実験で、もう少し長い距離の方がいけそうな感じがあると言われていたり、自分としても、純粋な短距離体質ではないと感じてはいた。しかし、これまでは400mHを諦めきれない気持ちと、マイルを走りたい気持ちから踏み出せずにいた。9月の27大戦を終えて、もう短距離に拘る必要もなくなったので、残りの半年、チャレンジしようと考えた。

転向して約3カ月が経とうとしているが、まだ手ごたえを掴めずにいるのが正直なところではある。最近では怪我をして休んでいたこともあるので、27大駅伝の時には何か感覚を得られていたら良いと思う。その先は、とにかく3月いっぱいまでチャレンジし続けたい。

III. 本当に残したいこと

ここまでを簡単にまとめるならば、「短距離全然上手くいなくて見切りつけて種目変えた」というなんとも後味の悪い内容なわけだが、そんなことを残したいわけではない。そんな中でも陸上競技を続けてきた理由があるのだ。

1. 走ること・陸上競技が好き

いつからか、どんなに辛い練習をしても、走ることが好きだという気持ちは変わらなくなった。みんなも、気持ちの揺れはあるにしても、走ることや陸上競技が好きだという気持ちは同じではないだろうか。これは、陸上を通して楽しいことも辛いこともたくさん経験してきたからこそ芽生える本当に価値のある気持ちだと思う。大学院に入ってから、脚が全然ダメで良くなる気配も無かった時、このまま辞めてトレーナー兼マネージャーにでもなろうかと本当に考えたこともあった。でも、やっぱり走ることが好きだから、乗り越えることができた。

2. 応援してくれる仲間がいる

大学での部員間の繋がりは、中学・高校とは比べ物にならないくらい強かった。それは飲み会があったり自由度が高いこと、男女の壁が薄れてくる年齢にあることなど理由は様々あると思うが、そういったことによる繋がりの強さは、競技の中でもしっかりと生きてくると感じた。そうした繋がりが、他人の競技を考えることや、チームを考えることにも繋がり、質の高い応援に繋がるのだと思う。

特に、マネージャーという組織は、今考えると本当に素晴らしい。最近になるまで強く意識したことがなかったのは恥ずかしいが、思えば中学の時はマネージャーはいなかったし、高校でも人数は本当に少なく、活動内容もそんなに充実したものではなかった。しかし、ちばりくのマネージャーはしっかりと組織立って活動している。ジャグの用意、練習のタイム測定・ノートへの記録、ゼッケンの用意、試合での動画撮影・記録計測、声援、その他にも選手の気づかないところで本当に様々なことをしてくれている。選手に充実した練習をしてほしい、少しでも良い結果を出してほしいという一心で。この気持ちに対して、自分はどうのように応えることができるか。それを考えるだけでも何か変わってくるのではないだろうか。

3. 居場所としてのちばりく

居場所があるというのは大切なことだ。これは述べるまでもないと思う。私もちばりくを大切な居場所の1つと思ってここまで来た。是非、残るみんなもちばりくという居場所を大切に続けてほしい。

4. 最後まで続けた者にだけわかることがあるはず

「4年間続けることが大事だ」という小宮山先生という言葉はもうみんな覚えたと思うが、続ければ続けるだけわかることがあると思う。5年6年続けて新たにわかることだってあった。それは時間をかけた者にしかわからないことのはずである。しかし、続ければ必ずわかることだってある。それは陸上競技以外にもこの先の人生で役に立つものだと思う。せっかく始めたのだから、最後までやってみようじゃないか。

IV. おわりに

正直、ここまで書いてきたことは、かなりの合理化を経たもので、綺麗事を感じる者もいると思う。しかし、意図的な合理化はとても重要なスキルだと思うし、そうやってどんどん前を向いていければそれだけ得を思う。そして、いずれその合理化された感情は、本当の感情になると思う。

最後に、この6年間で得た1番の宝物を言葉にして終わりたいと思うが、長くなるだけだからまとめよう。

ちばりくが好きだ

(ここでクリスマスソングが流れる)

2018.12.24 金子元貴